石ヶ谷遺跡

―― 県道吉備金谷線道路改築工事に伴う発掘調査 ――

2003年10月

財団法人　和歌山県文化財センター

例　　言

1．本書は和歌山県有田郡吉備町西丹生図に所在する石ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は県道吉備金谷線道路改築工事に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人 和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査組織は下記のとおりである。

事務局

専務理事（事務局長兼務）岩橋 驍
事務局次長　松田 正昭
管理課長　西本 悦子
管理課副主査　松尾 克人

調査担当部局

埋蔵文化財課長　渋谷 高秀
埋蔵文化財課主任 村田　弘
専門調査員　藤村 瑞穂

4．本書の執筆・編集は村田が担当した。

5．調査および整理作業で作成した実測図・写真・遺物台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡　　例

1．本文中の遺構実測図および地区割の基準線は国土座標第Ⅵ系に基づいている。北方位は国土座標北を示す。また、土層図等の基準高は東京湾標準潮位（T．P．＋）の数値である。

2．実測図の土層の色調には日本色研事業株式会社『新版標準土色帖』を使用した。

本 文 目 次

Ⅰ調査に至る経緯と発掘調査の位置及び周辺の遺跡 …… 1
Ⅱ調　　査 …… 2
1 調査地の地区割および調査区の呼称 …… 2
2 A・D・E区の遺構 …… 2
3 B・C区の調査 …… 8
4 出土遺物 …… 8
Ⅲま　と　め …… 13

挿 図 目 次

図1調査地と周辺の遺跡 …… 1
図2調査区仮称図 …… 2
図3土坑７０５実測図 …… 3
図4調査区西壁基本土層柱状図 …… 3
図5井戸３０実測図 …… 4
図6 A～E区遺構平面図 …… 5・6
図7 建物1実測図 …… 7
図8 建物2実測図 …… 7
図9 包含層出土の遺物 …… 9
図１０ 遺構出土の遺物（1）…… １０
図１１ 遺構出土の遺物（2）…… １１

図版目次

図版 1
1．調査地遠景（南東から）
2．調査前風景（東から）
3．遺構検出状況（西から）

図版 2
1．A区遠景（東から）
2．A区全景（東から）
3．A区区講と屋敷地（東から）

図版 3
1．建物1（北から）
2．建物2（東から）
3．溝１２・１３（東から）
4．溝１２セクション（東から）
5．溝１３セクション（東から）

図版 4
1．井戸３０（西から）
2．井戸２０（東から）
3．井戸２５（東から）

図版 5
1．土坑9（東から）
2．土坑9 土器出土状況
3．土坑２８（東から）
4．柱穴３３０土師皿出土状況
5．土坑２７（南から）
6．柱穴３３ 瓦器碗出土状況
7．土坑７７１（北から）

図版 6
1．D区全景（西から）
2．D区東端部・建物3（北から）
3．土坑７０５（東から）

図版 7
1．土坑７０５細部状況（北から）
2．D区 南壁土層
3．B・C区全景（東から）
4．E区全景（南から）

図版 8
出土遺物

Ⅰ調査に至る経緯と発掘調査の位置および周辺の遺跡

遺跡の所在する吉備町は有田郡の西方に位置し、町域は有田川の下流域両岸に広がっている。石ヶ谷遺跡は同町内の字西丹生図に所在しているが、この辺りは有田川南岸の河岸段丘に当たっており、標高は調査地付近で約４０ｍとなっている。

近年、同地区を通って隣接する金屋町へと抜ける新たな県道が計画されたため平成１３年度に対象地内において県文化財課が試掘調査を実施したところ、中世の遺構・遺物が確認された。このため当該地においては本格的な発掘調査の必要があるとの行政判断に達した。

これを受け工事担当課である有田振興局道路課と県教育委員会文化財課との間で協議・調整がなされ当文化財センターが発掘調査を委託されることとなった。

石ヶ谷遺跡は古墳時代の須恵器の散布地としては知られていたが、これまで発掘調査が実施されたことはなく、その実態がよくわかっていない遺跡であったと言える。また、隣接する遺跡はなく、これまで発掘調査が数多く実施されてきた吉備町内にあっては、空白域とでも言うべき地区である。

なお、周辺の遺跡としては、図１に図示したように有田川南岸の沖積地には弥生時代の環濠集落として知られる田殿・尾中遺跡が所在するほか、県の史跡となっている藤並神社境内の天

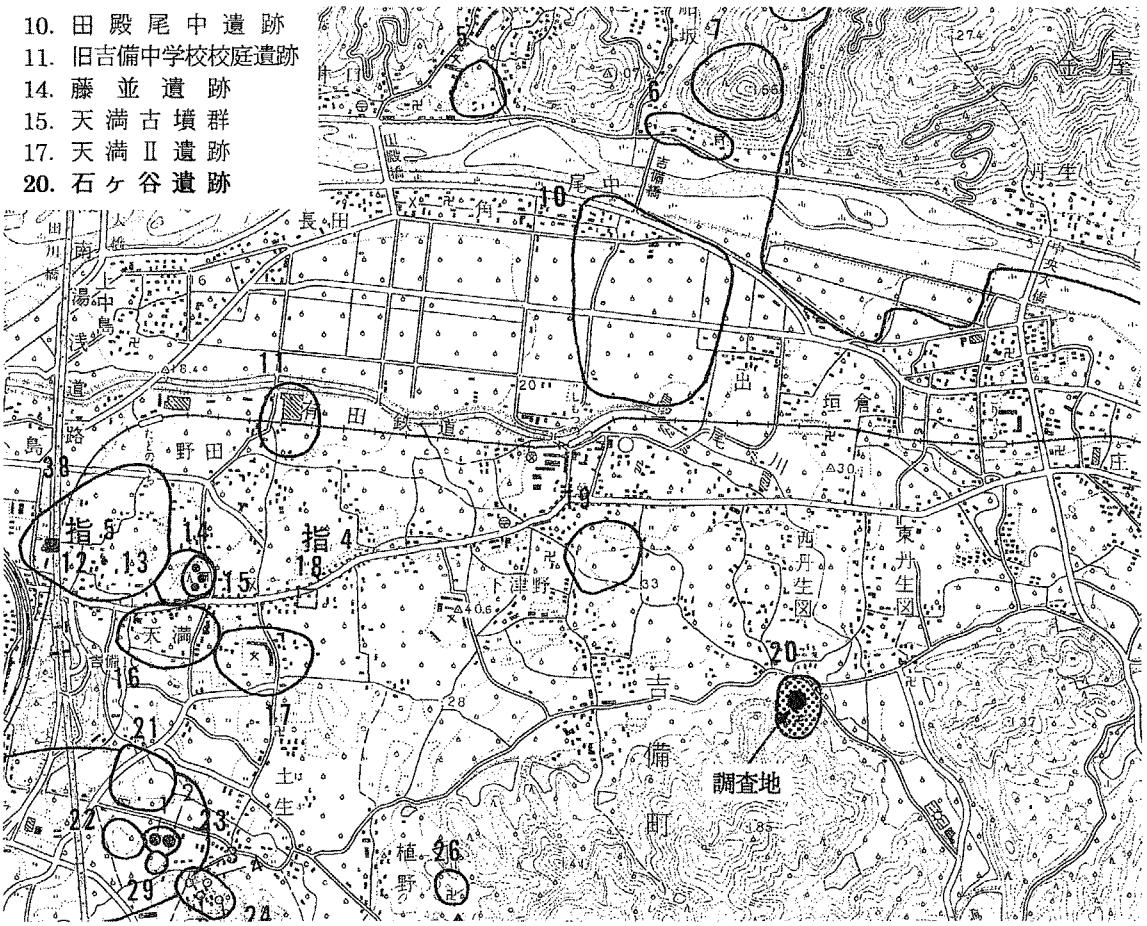


図１　調査地と周辺の遺跡

満１号墳(泣沢女の古墳)、室町時代の城跡である藤並城跡が所在している。

Ⅱ　調　　査

１　調査地の地区割および調査区の呼称

調査地の地区割は、石ヶ谷遺跡を網羅するよう国土座標第Ⅵ系のＸ＝－７1.00、Ｙ＝－２１５.１０を原点とし、西及び南に５００ｍの大区画を設定した。次いでその５００ｍの大区画を２５等分し、原点から西に１・２・３・…、南にＡ・Ｂ・Ｃ・…と記号を付し、中区画(１００m方眼)を設定している。さらに１００ｍの中区画を６２５等分し、４ｍ方眼の区画割(小区画)を行っている。実測基準点および遺物の取り上げは、上記の地区割り(小区画)を使用している。なお、本調査区は中区画で言えば、２Ｂ区に相当する。

また、こうした地区割とは別に、便宜上、調査地区内を横切る畦畔・水路によって調査区を細分し、Ａ～Ｅ区と仮称した。(図２参照) 以下の調査の概要では、この仮称名に拠って述べることにする。なお、Ｄ・Ｅ区については、Ａ区の調査終了後、折り返す形で調査を実施している。このため図面についてはそれらをまとめた形で提示しているが、写真については別個なものになっている。

２　Ａ・Ｄ・Ｅ区の遺構

Ａ・Ｄ・Ｅ区の現況はいずれも柑橘畑であり、それ以前は水田として利用されていたようである。水田耕作土は一部で２次期認められるが、下層の古い方でも近世以降のものである。南側では、これらの耕作土直下が明褐色の地山(2.5Ｙ7/６)となっており、この部分については、地山を床土代わりにしており床土は施されていないが、この地山は北側に寄るにつれて下がっていっていることから、これらの箇所では周囲の地山の土を用いて厚さ２ないし３cmほどの床を貼り付けている。

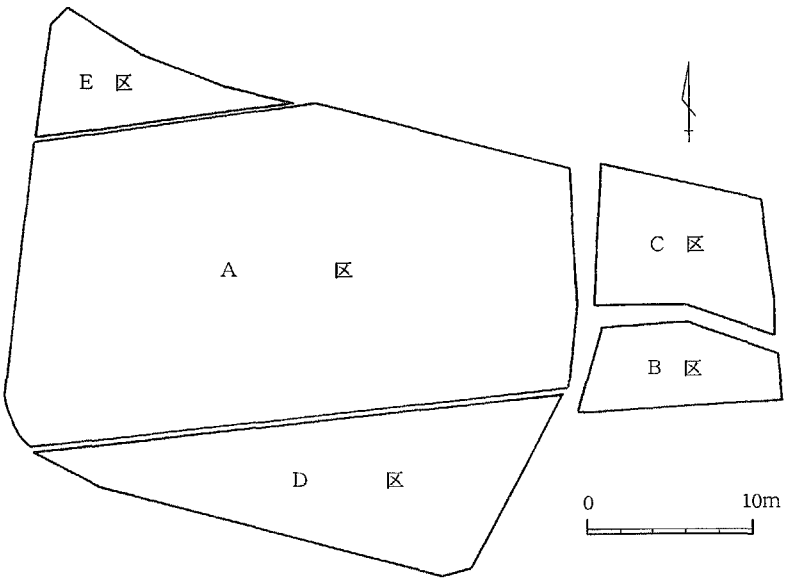


図２　調査区仮称図

包含層について言えば、前述のような地形から南側ではほとんど存在しないか、あっても数cmほどであるが、北側では厚く、Ｅ区の北端では８０cmほどと厚く堆積している。

この包含層から出土する遺物は、１３世紀代の瓦器・土師器を中心として１５世

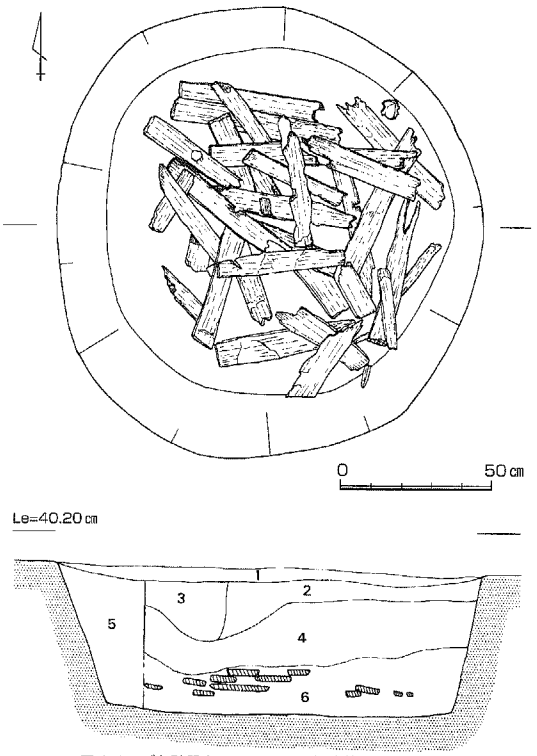
紀代の土師器、備前焼の壺・擂鉢などが認められ、近世の遺物は入ってきていない。事実、近世の遺構はこの包含層を切って造られている。この包含層によって構成されている面を第１遺構面としている。

この包含層を除去した地山の面を第２遺構面としているが、この面では中世(13ｃ～15ｃ)の遺構を数多く検出している。とくにＡ区に集中しており、掘立柱建物の柱穴と思われる遺構だけでも600個余りとかなりの遺構密度であった。以下、主要な遺構についてその概略を記すこととする。

土坑797　第１遺構面(調査区Ｄ区包含層)を切って造られている土坑である。径1.5ｍ、深さ0.8ｍを測り、ほぼ垂直に掘られており、桶が設置されていた可能性が高いものと考えている。遺物としては、近世の瓦のほか京焼きの碗など近世陶器が何点か出土している。

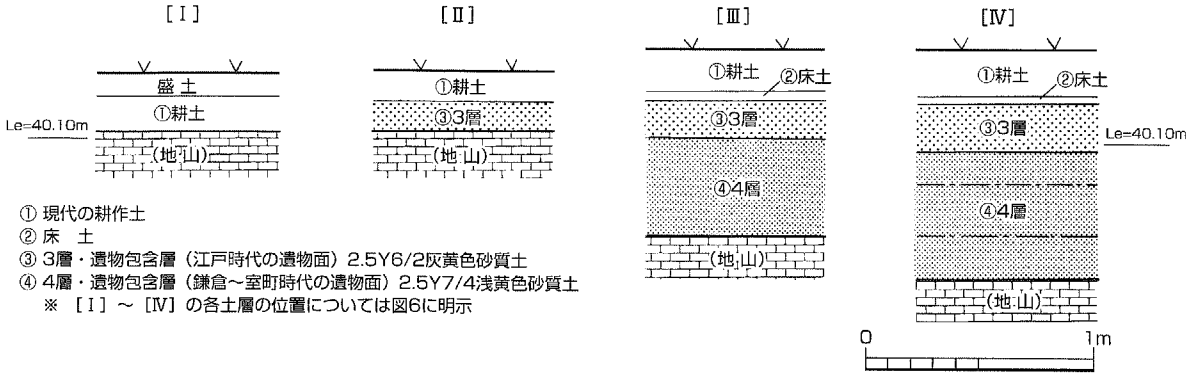
土坑705　径1.4ｍ、深さ0.5ｍを測る土坑で、中層には15cm前後の石が乱雑に投げ込まれた状態で埋まっていた。その下層には７～10cm、長さ40～50cm、厚さ２cmほどの板材が31本、やや底部から浮いた状況で折り重なって出土した。(図３参照)　板材の一方は加工により平坦面をなしているが、他方は欠損している。おそらく結い桶の部材であったものと思われる。この土坑からは、唐津焼の碗が出土している。

上記の二つの土坑は出土遺物からも確実に近世の遺構と言えるものであるが、その他土坑771や土坑27・土坑216については出土遺物そのものは中世のものであるが、同様の形状を呈し、同じよう



1. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　2. 5Y5/1 灰色砂質土　3. 5Y6/1 灰色砂質土
4. 5Y6/1 灰色粗砂　5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土　6. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土

図３　土坑705実測図



① 現代の耕作土
② 床　土
③ 3層・遺物包含層（江戸時代の遺物面）2.5Y6/2灰黄色砂質土
④ 4層・遺物包含層（鎌倉～室町時代の遺物面）2.5Y7/4浅黄色砂質土
※ [Ⅰ] ～ [Ⅳ] の各土層の位置については図6に明示

図４　調査区西壁基本土層柱状図

に石が投げ込まれた状況で検出されており、近世のものである可能性も考えられよう。

土坑９　一辺1.8ｍほどの方形の土坑で、２段落ちになっており、深い方で約70 cm、浅い方で約50 cmの深さを測る。人骨などはまったく検出していないが、低部の南辺近くに土師器の皿が５枚埋納された状況で出土しており(写真図版５－１・２参照)、墓である可能性を考えている。遺物としては、上層から備前の擂鉢、中国製の染付け皿が出土しており、これらの年代観から概ね15世紀中頃から後半にかけての遺構と判断している。
これら３基の土坑(24・28・29)については、底面部が比較的平坦に整えられていることなどから、墓である可能性も考えられよう。ただし、埋納されたと思われる土器もなく、いずれも人骨などはまったく検出されていない。

井戸20　Ａ区の東端で検出したもので、東側の1/3ほどが現代の水路により上部を削平されている。上部では径2.5ｍほどであるが、深さ80 cmほどを斜めに２段に掘り進んだ後、そこから径1.0ｍほどの大きさでほぼ垂直に1.5ｍほど掘り込んでおり、検出面からの深さは約2.3ｍである。底部には曲げ物や四石(よついし)などは置かれておらず、素掘りの井戸であったものと考えている。出土遺物はまったくなく、時期については不明であるが、後述する13世紀代と思われる溝１９を切って作られていることからこの溝よりは新しいものと言える。

井戸25　Ａ区のほぼ中央で検出した井戸であり、径1.2ｍほどで、深さ約1.7ｍを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、素掘りの井戸であったものと思われる。出土遺物は少量ではあるが、13世紀代の瓦器碗、土師器の皿に混じって15世紀代と思われる土師器の皿が出土している。

井戸30　Ａ区の北端近くで検出した井戸で、上面では径1.5ｍほどとラッパ状に広がっているが、１ｍほど斜めに掘り下げたところで径80 cmほどにすぼめられ、そこからはほぼ垂直に1.5ｍほど掘り込まれている。検出面からの深さは約2.3ｍを測る。この井戸についても素掘りであったものと思われる。出土遺物はなく、時期については不

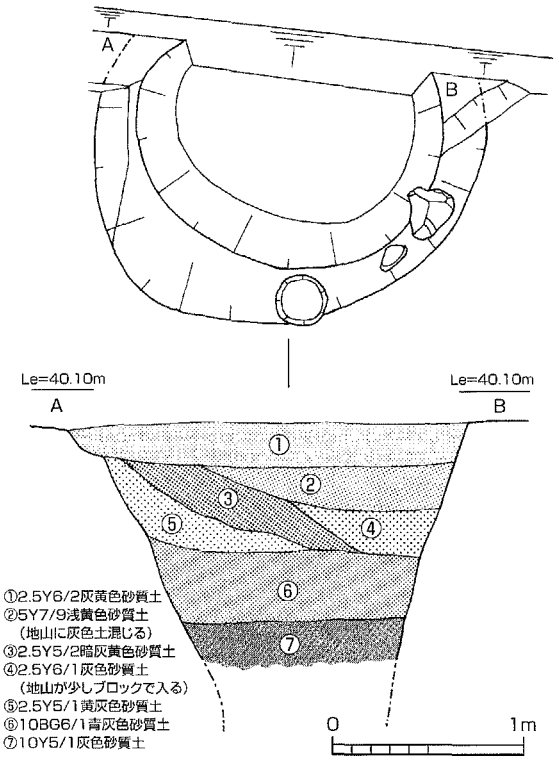


図５　井戸30実測図

《調査区仮称図》

図6　A～E区遺構平面図

明である。

溝12　幅約70 cm、深さ30 cmほどの東西に延びる溝で、東側では浅くなって途切れているが、西側では調査区の西端ぎりぎりで北側に直角に折れ曲がる。おそらくD区の西端で検出している溝778につながっていくものであろう。溝の南側の肩口の一部に1段の石列が残っている。この石列は後述する溝13の埋土の上に乗っており、このことから溝13よりは新しいものと言える。出土遺物は13世紀代の瓦器片に混じって15世紀代の土師器の皿が出土している。

溝13　溝12のすぐ南側を同じ方向に延びる溝で、幅、深さとも溝12とほぼ同じ規模である。出土遺物についても溝12と同じであり、出土遺物からは時期差は認められないが、切り合い関係からこの溝が埋められた後、溝12が造られており、同時期に2条の溝が機能していたわけではない。

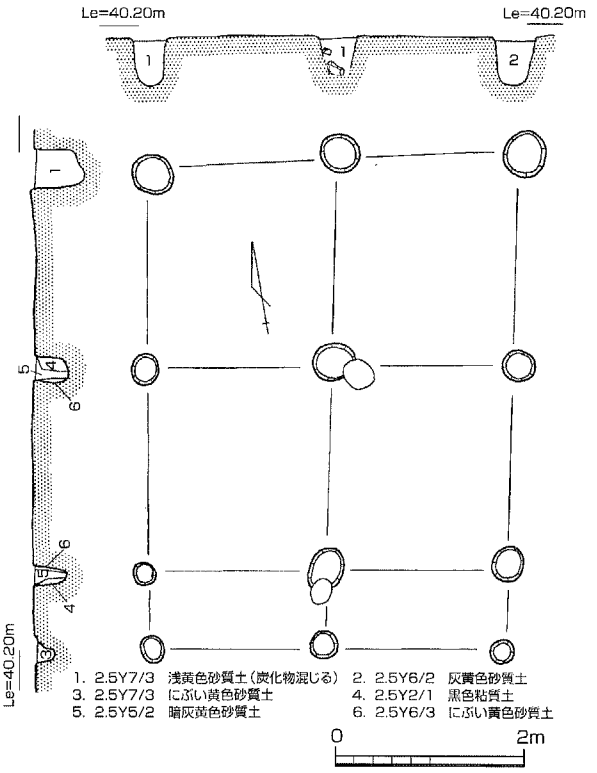


図7　建物1実測図

溝14　溝13に対し垂直方向に延びる溝で、幅80 cm前後、深さは30 cmほどである。南側では次第に浅くなり途切れている。この溝については15世紀代の遺物が少量出土していることや、溝13とつながっていることから溝13と同時期に機能していたものと言えよう。

溝16　A区の北端ぎりぎりで検出した溝で、現在の石垣と同じ方向であり、北側の半分以上が現代の石垣を造る際に削り取られてしまっている。このことは、現在の石垣が往時の溝(屋敷地の境)を踏襲している

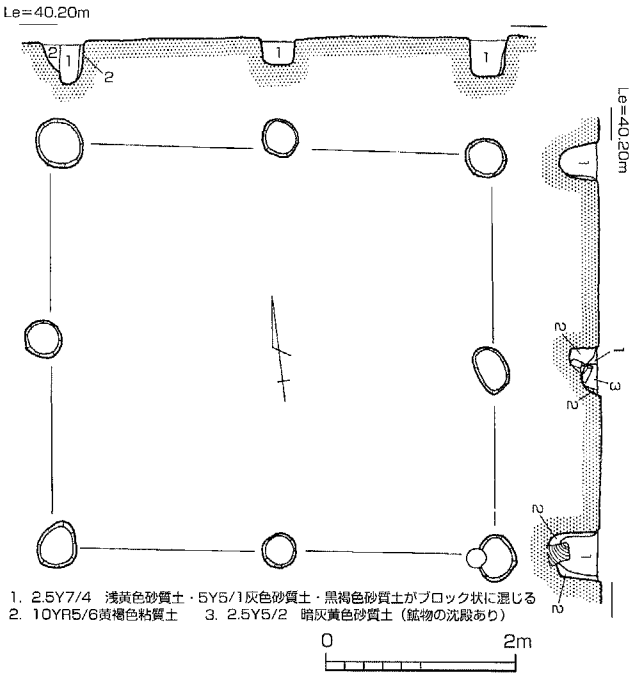


図8　建物2実測図

ことを物語るものと言えよう。出土遺物は、13世紀代の瓦器片や土師器の皿で、15世紀に入るものは出土していない。

溝19　A区の東端を南北方向に走る溝で、前述の井戸20によって切られている。幅は70 cmほどで、深さは20～40 cmである。南側ほど深く、とくに底部がV字形に鋭く掘られている。遺物は少量だが13世紀代の瓦器片や土師器の皿が出土しており、ここでもそれ以降の時期の遺物については確認していない。

建物1　A区のほぼ中央で確認した建物で、東西2間、南北2間の規模を有し、庇であろうか南側に半間分広がっている。柱間は東西が約1.8 m、南北が約2.1 mである。総柱の建物で、柱掘り方は径30 cm前後、深さは40 cmほどであるが、庇部と思われる柱の掘り方は径20 cm、深さ20 cmとやや小振りである。このうち二つの柱穴から13世紀代の瓦器片が出土している。

建物2　東西2間、南北2間の建物である。柱間は各間とも約2.1 mとなっている。柱の掘り方は径40 cm前後、深さも40 cmほどである。この建物についても、二つの柱穴から13世紀代の瓦器片と土師器の皿の小破片が出土している。

建物3　A区からD区にまたがる建物で、東西2間、南北2間の規模である。柱間は2.3前後であり、他の建物に較べるとやや広くなっている。この建物については、出土遺物がまったく無く、時期については不明と言わざるを得ない。

3　B・C区の調査

BおよびC区においては、遺構をまったく検出することができなかった。B区はA区よりも一段高く、またC区についても高さ的にはA区よりわずかに下がるだけであり、後世に著しい削平を受けたとは考えられない状況である。したがって、遺跡の広がりは先に述べたA区東端の溝19をもって東限とするものと考えられよう。

4　出土遺物

a．3層出土の遺物

(1)は土師質の鍋である。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり、端部を上方に摘み上げるようにしてまとめている。全体に薄い茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒が入れられている。和歌山県下、とりわけ紀ノ川流域において、普遍的に見られるタイプと言えよう。(2)の土師質皿は、体

部が大きく外反するもので、畿内の影響を強く受けたタイプの皿である。胎土は比較的よく水簸されており、膚色を呈している。(3)の天目茶碗は、よく焼き締まってはいるが国産のものと思われ、釉には光沢はなく茶色味のつよい褐色を呈している。これらの遺物は概ね15世紀代のものと考えてよく、この時期より新しい時期の遺物は確認していない。このことから3層については15世紀段階に整地により堆積したものと思われる。

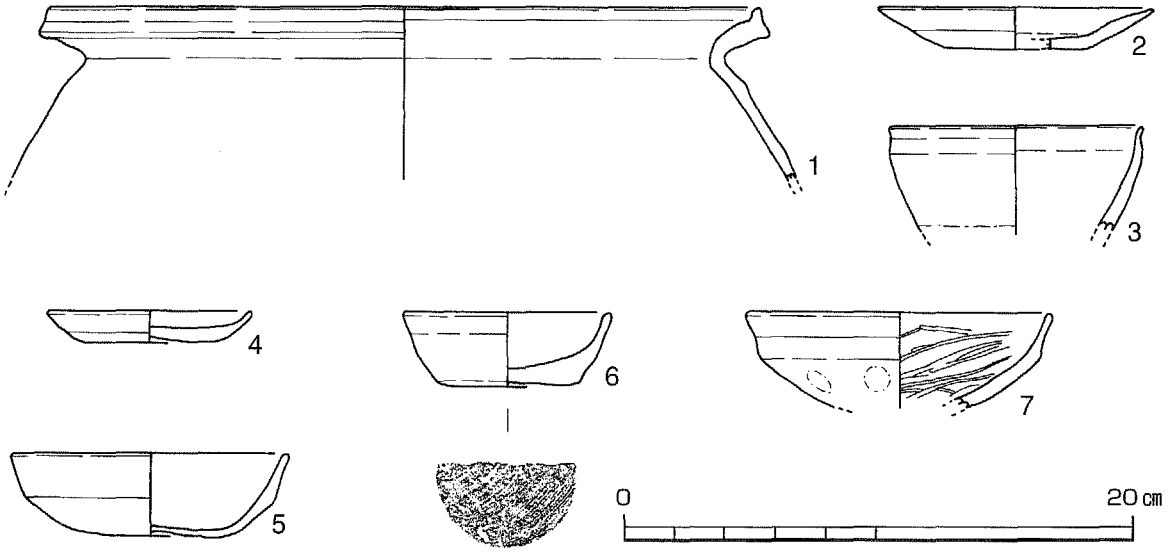
b．4層出土の遺物

(4～6)はともに土師質の皿であるが、このうち(4)は小皿で口径8㌢ほど、器高は1.5 cmと低くなっている。これに対して(5)の大皿は器高3㌢ほどと口径に比して深手の皿である。ともに明るい膚色を呈している。(6)の皿の底部は糸切りにより処理されている。この皿も口径に比して器高は高く、低部が肉厚である。県下においては土師質皿の底部糸切りは12世紀に盛行し、13世紀の初めまで残ることが知られているが、本例については共伴する他の土器から13世紀代の可能性が高いものと考えている。(7)の瓦器碗の口縁部は強いヨコナデが施されているため薄くなっているが、体部はやや厚手のものである。体部内面に施された暗文の幅は3 ほどで間隔は雑である。高台部を欠いており、時期については断定し難いがおそらく13前半段階のものと思われる。

c．遺構出土の遺物

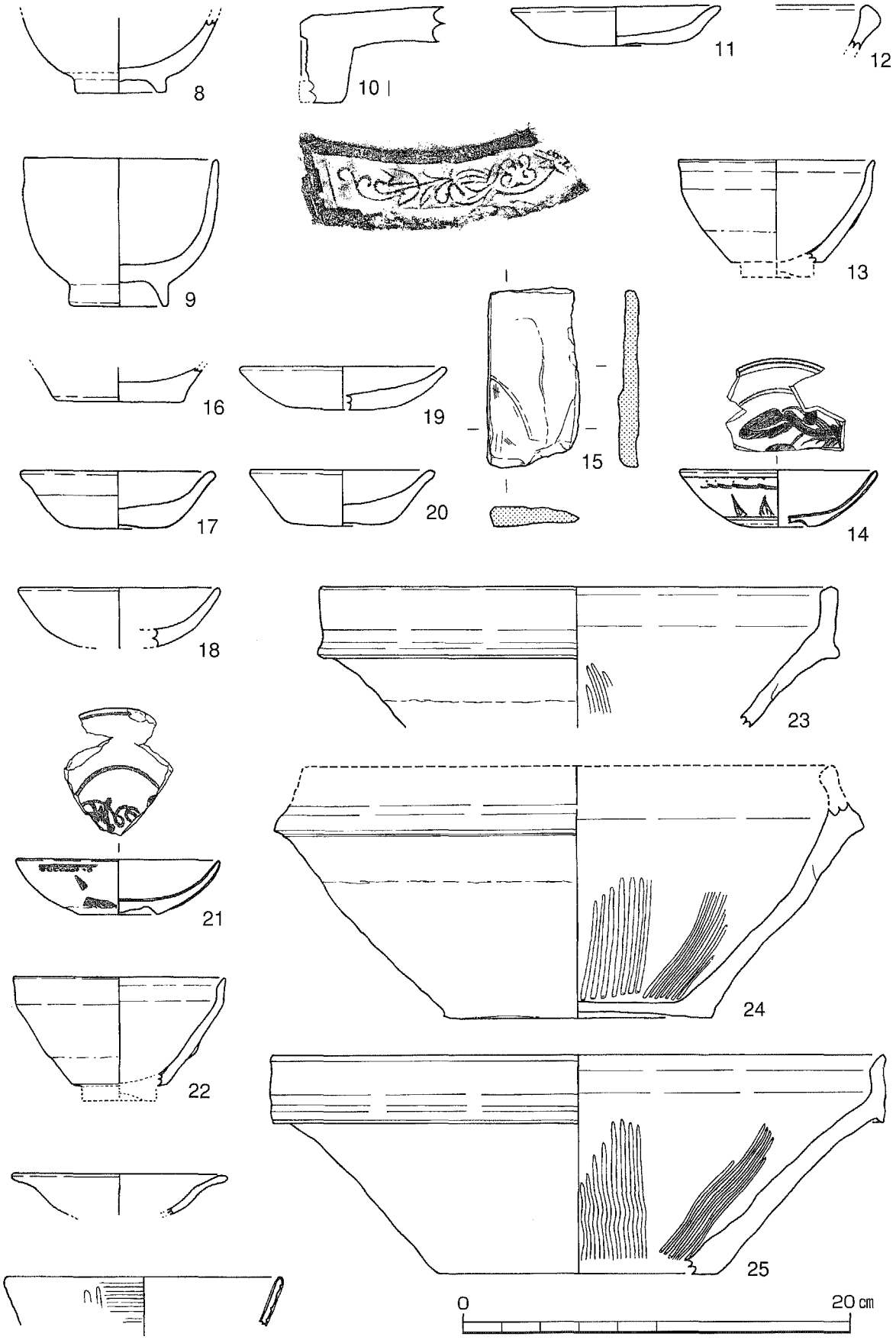
遺構からの遺物は少なく、各遺構からほんの数片が出土している状況である。このためここでは遺構別に説明を加えるのではなく一括して取り扱かっている。遺構との対応関係については、遺物実測図の下の番号を参照されたい。

(8)は唐津焼きの碗である。低部はやや粗い削りだし。釉は淡い黄緑色を呈し、一部高台部付近まで及んでいる。(9)は京焼きと思われる碗で、体部はほぼまっすぐ立ち上がり口縁部はかすか



3層出土遺物（1～3）　4層出土遺物（4～7）

図9　包含層出土の遺物

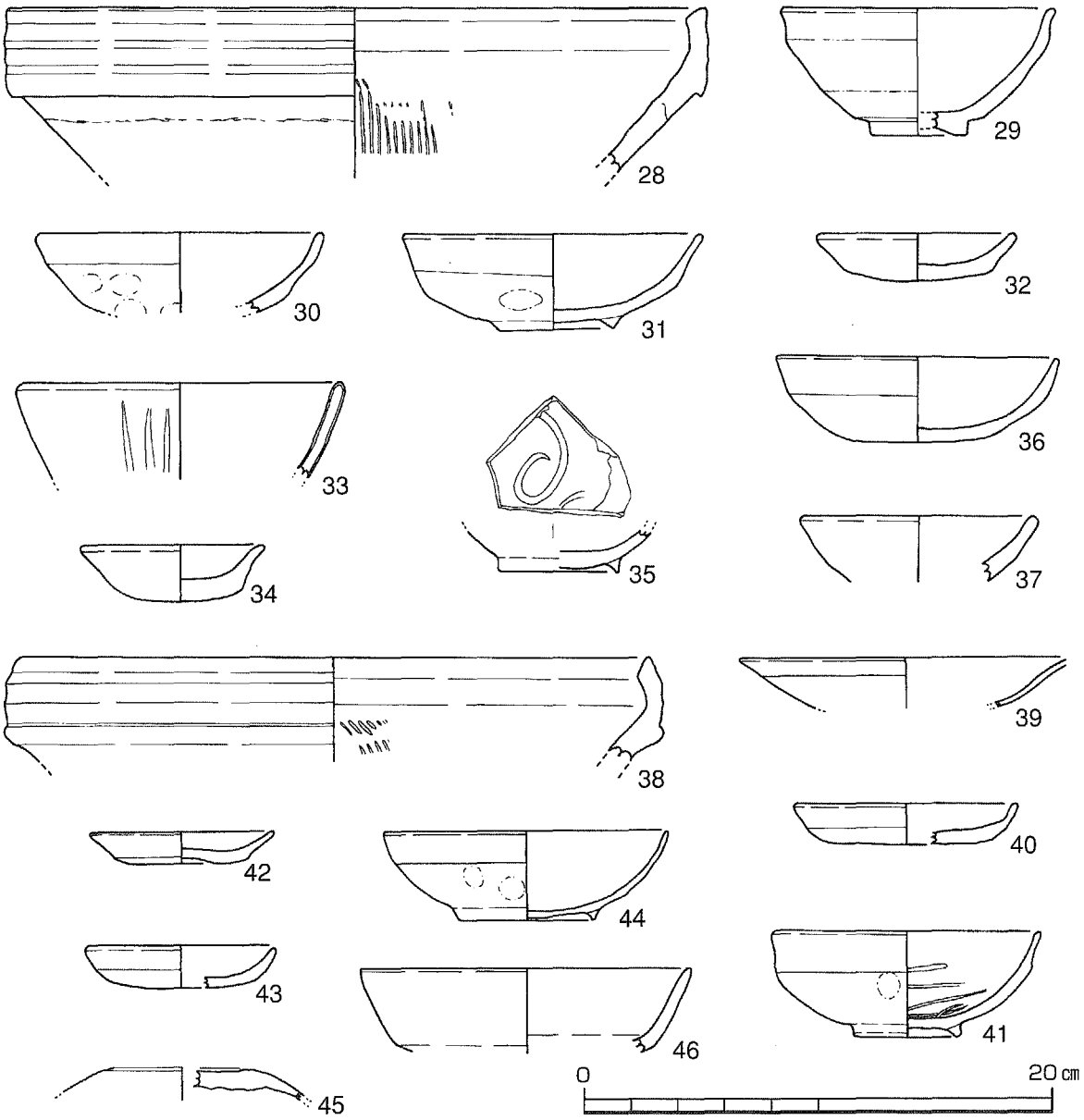


遺構705(8) 遺構797(9) 遺構771(10) 遺構3(11・12) 遺構8(13～15)
遺構9(16～21) 遺構11(22～25) 遺構14(26) 遺構15(27)

図10　遺構出土の遺物（1）

に外反している。内面は光沢のある黄白色を呈しているが、体部下半は施釉されているにもかかわらず、焼成不良のためか白濁色を呈する。

(10)の軒平瓦の文様は線も細く比較的丁寧なつくりで、圏線は両端にのみ施されている。おそらく15世紀でも前半の製品であろう。なお、瓦については、近世の遺構から桟瓦はいくつか出土しているが、中世のもので図示しえたのはこの1点のみである。(11)の天目茶碗の胎土はややパサついた軟質のもので国産と考えられ全体に茶褐色を呈している。(12)は中国製の染付け皿で、高台は低部が抉られる、いわゆる碁笥底となっている。外面体部下半には簡略された蕉葉文が描かれている。(16～20)は土坑9に埋納されていた土師質の皿である。いずれも口径



遺構12(28) 遺構19(29) 遺構26(30) 遺構33(31) 遺構94(32) 遺構97(33)
遺構103(34) 遺構170(35) 遺構330(36) 遺構365(37) 遺構475(38) 遺構521(39)
遺構543(40) 遺構617(41) 遺構800(42～44) 遺構700(45～46)

図11　遺構出土の遺物（2）

10.5 cm、器高3.0 cmを測り、やや赤味を帯びた褐色を呈している。体部は斜め上方に立ち上がり、低部が部厚いことが大きな特徴となっている。あまり見かけないタイプの皿であり、おそらく在地のものであろう。時代的には共伴して出土している染付け皿から15世紀中頃のものと考えている。(21)も碁笥底タイプの染付け皿である。低部内面には簡略され粗雑な吉祥文字である「寿」が描かれている。焼きが甘く軟質で釉の発色もくすんでおり全体に粗雑な感が否めない製品である。(22)は中国製と思われる天目茶碗である。全体に光沢のある茶褐色を呈している。(23～26)は備前焼の擂鉢で、口縁部の形態から15世紀のものと判断される製品である。いずれも茶色ないし薄い赤茶色を呈しており、内面の擂り目は体部下半から底部にかけて施されている。(26)の土師質皿は、赤茶色を呈し薄手のもので、口縁部が大きく外反するものである。このタイプは畿内、京都系の土師質皿に類するものといえよう。

(27)は中国製の青磁の碗である。草緑色を呈し、口縁部付近には横方向の文様らしき数条の線が入れられている。おそらく本来は雷文帯を意識していたものと思われるが判然としない。時期的には15世紀後半段階の製品であろう。

(28)は備前の擂鉢である。前述した擂鉢と同タイプのものであり、時期的にはやはり15世紀の製品と言える。ただ、色調が内面はやや濃い膚色、外面は赤味を帯びた膚色に近く、この時期に一般に見受けられる備前の擂鉢と比べると色調がかなり明るいと言えよう。(29)は中国製の天目茶碗である。口縁部付近は艶のある茶色、内面と体部外面は黒みがかった紫色を呈している。体部下半の露胎部分は灰白色で化粧がけは行われていない。(30)の土師質皿はややくすんだ膚色を呈し、口縁部は丁寧なナデ調整が施されているが、体部は指押えの痕跡が明瞭に残るなど雑な感じである。

(31)の瓦器碗の高台部は断面が三角形を呈しており、概ね13世紀の前半段階の製品と考えている。口径に比べてやや器高が低い感がある。(32)の土師質皿は淡い膚色を呈し、口縁部には強いヨコナデが施されており底部は未調整である。このタイプの土師質皿は紀ノ川流域では普遍的に見られるもので、有田川流域の当遺跡にまで及んでいたことを知る好資料と言えよう。

(33)は中国製の青磁の碗である。体部には簡略された線描の連弁が描かれている。(34)の瓦器碗は断面三角形の高台で内面底部にはループ状の暗文が施されている。(38)の備前の擂鉢はよく焼き締まりこげ茶色を呈している。擂目は口縁部直下から施されており、また、口縁部はやや凹線状の窪みが現れはじめており、15世紀代でも新しいものと思われる。(39)の土師質皿は体部から口縁にかけて大きく外反する京都系のタイプのもので、極めて薄手で作りが丁寧である。これについては搬入品である可能性も考えられよう。時期的には15世紀代のものである。これに比べて(40・42・43)の皿は後述する瓦器碗に伴う時期のものと考えられる小皿である。

(41)の瓦器碗は体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がり、口径に比して器高が高い。また、高台も台形に近く、「ハ」の字状に張り出すなどしっかりとした作りである。一見古いタイプに見受けられるが、内面の暗文からすれば13世紀代と考えてよく、この地域の瓦器碗の特徴をよく現しているものと言えよう。これに比べて(44)の瓦器碗は、外側に開き気味で高台部もこの時期に見られる断面三角形を呈するなど紀ノ川流域のものと差異は感じられない。

(45・46)は奈良時代の須恵器の坏蓋および坏である。須恵器について図示しえたのはこの2点であるが、調査ではこれ以外にも量こそ少ないものの他にも何点か出土を確認している。とくに焼きひずみがひどく、商品として流通し難いものもあり、このことから付近に当該期の窯跡の存在していた可能性が考えられよう。

Ⅲ まとめ

これまで述べてきたように、今回の調査においては、B・C区を除けば遺構密度は極めて高い状況であった。しかしその反面、出土遺物の量はコンテナに換算して4箱と少なく、また、大部分が細かな破片である。このため各遺構の時期を決定するには非常に心もとない状況にあると言えよう。したがって、ここでは、限られた条件の中で遺跡の消長、性格などをなぞっておきたい。

出土遺物から見て、当地に人々が住み始めるようになるのは鎌倉時代であり、もう少し詳しく述べれば13世紀中頃から後半にかけての時期と言えよう。この時期の遺物が最も多いことから盛況を呈したのもこの時期であり、溝19で東を限り、溝16で北側を画して屋敷地としたものと思われる。建物も柱穴の数から推して複数棟が同時期に並存しており、かつかなりの頻度で建替えがなされたことが窺われる。

その後14世紀に入ると遺跡は一時途絶えるか規模をかなり縮小し衰退していたことが考えられる。

再び活況を呈するのは15世紀に入ってからで、この時期に溝13・14などで敷地の細分がなされたものと思われる。井戸20および井戸30などもこの時期に掘られた可能性を考えている。また墓の可能性を考えた土坑9もこの時期であろうし、屋敷地の中に入ってきていることから、“屋敷墓”と言われるものになるのであろう。なお、井戸のつくりについて付言しておけば、通例県下においては、この時期の井戸は石積みもしくは木枠井戸が多いことが知られているが、今回検出した井戸は3基ともすべて素掘りと思われるものであった。巧拙を問わなければ技術的にはさほど難しいものとは思えない中で、あえて素掘りとした積極的理由は見当たらないが、当地の地山は非常に崩れにくい土質であり、このことが井戸を素掘りのままとした理由であるかもしれない。また、当遺跡は南側に山を背負っており、現在でも谷水が豊富で、当

時にあってはこの谷水が日常生活のなかで重きをなしていたものと思われ、井戸への比重が軽かったことに起因するのかもしれない。

さて、15世紀に入って活況を呈したこの遺跡は、出土遺物から見ると15世紀の後半(第4四半期)段階で再度途絶、もしくは衰退しているようである。

その後、江戸時代のはじめ(17世紀)になると再び生活の場として使われたようであるが、その期間は短く、江戸時代中頃までは続かなかったものと思われ、廃絶後は現在に至るまで農地として使われてきたものと思われる。

以上が、本遺跡の消長であるが、次にその性格について考えておきたい。

調査の成果から遺跡はこれ以上東側に広がっていないことを確認しており、また、調査に先立つ試掘調査結果から西側にもさほど広がっていないことが確認されている。このことからすると遺跡としての東西の範囲は極めて狭いものであり、中世の一般集落とは考え難いと言えよう。

吉備町史を紐解いてもこの地にこの時期何らかの施設があったとの記載はなく、そのほかにも該当する記録類はいっさい残っていない。ただ、地元の伝承として尼寺があったと伝えられており、現にその系譜をひくものか否かは不明であるが、当遺跡の南側の山麓には地蔵堂が現存していて地元民の信仰を集めている。

こうしたことから、ひとつの想像を込めた可能性ではあるが、当調査区の南側に中世の寺院が営まれており、今回検出した屋敷地はその寺院に付属する施設ではなかったかとも思っている。

ともあれ限られた資料であり、当遺跡の実態の全容解明には程遠い状況ではあるが、冒頭にも述べたように吉備町にあっては空白域であったこの地で発掘調査が実施され、中世の考古資料を得たこと、また、解明への端緒を得ることができたことの意義は大きいものと言えよう。

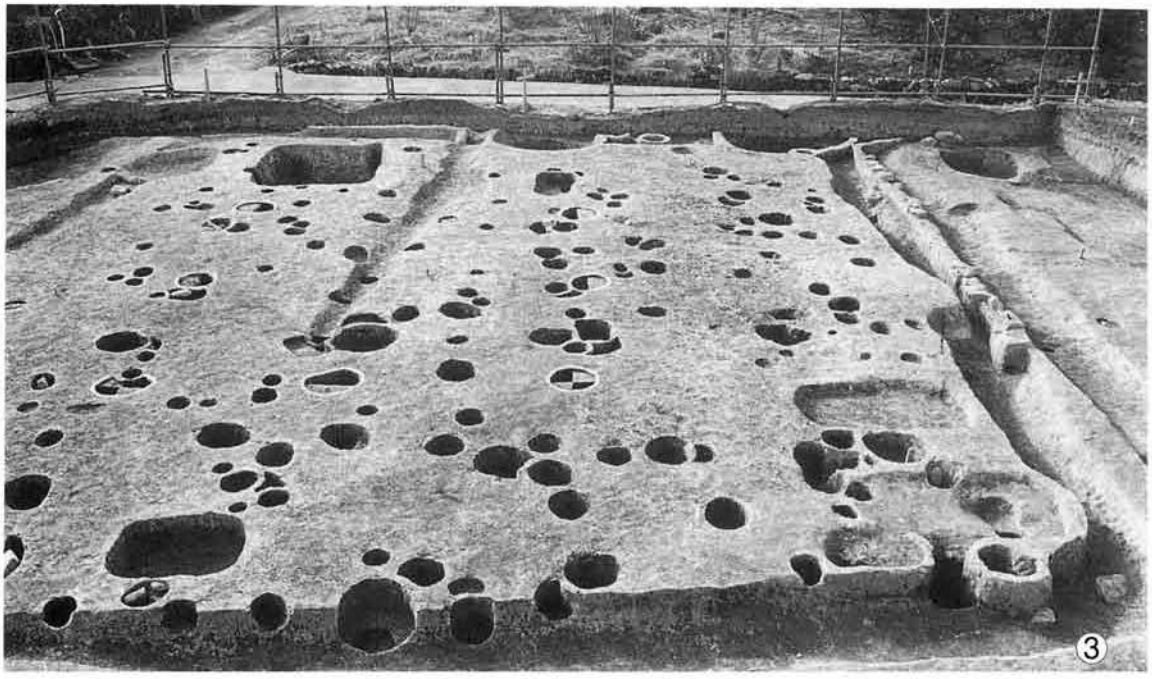
1.調査地遠景
（南東から）

2.調査前風景
（東から）

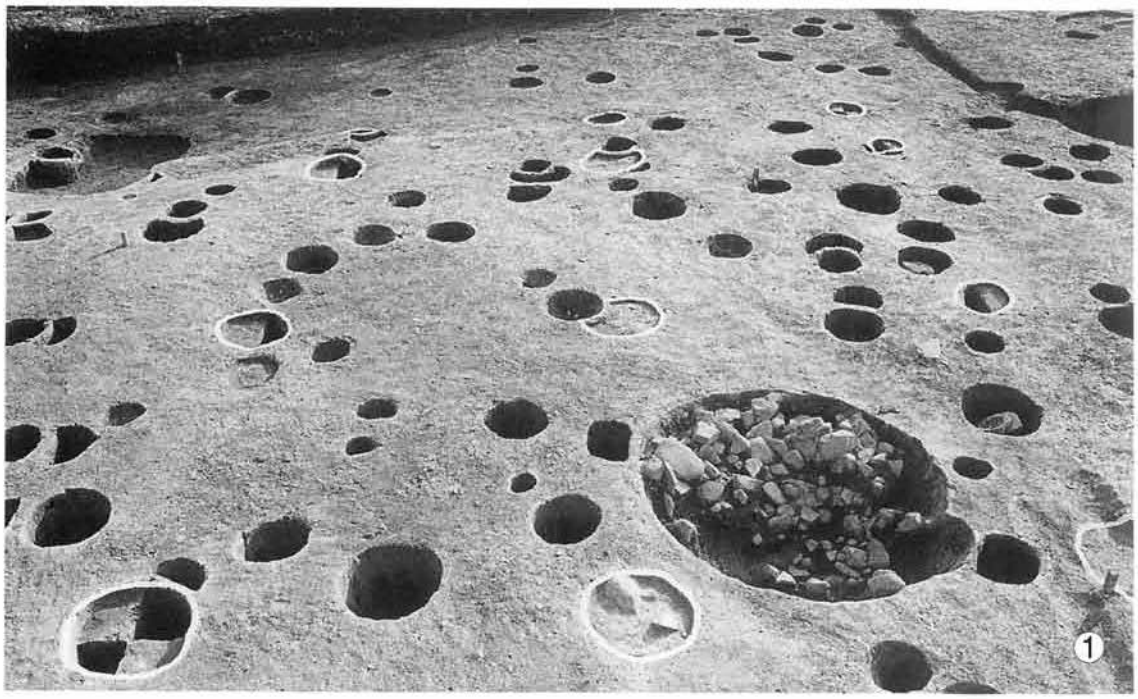
3.遺構検出状況
（西から）

1.A区遠景
（東から）

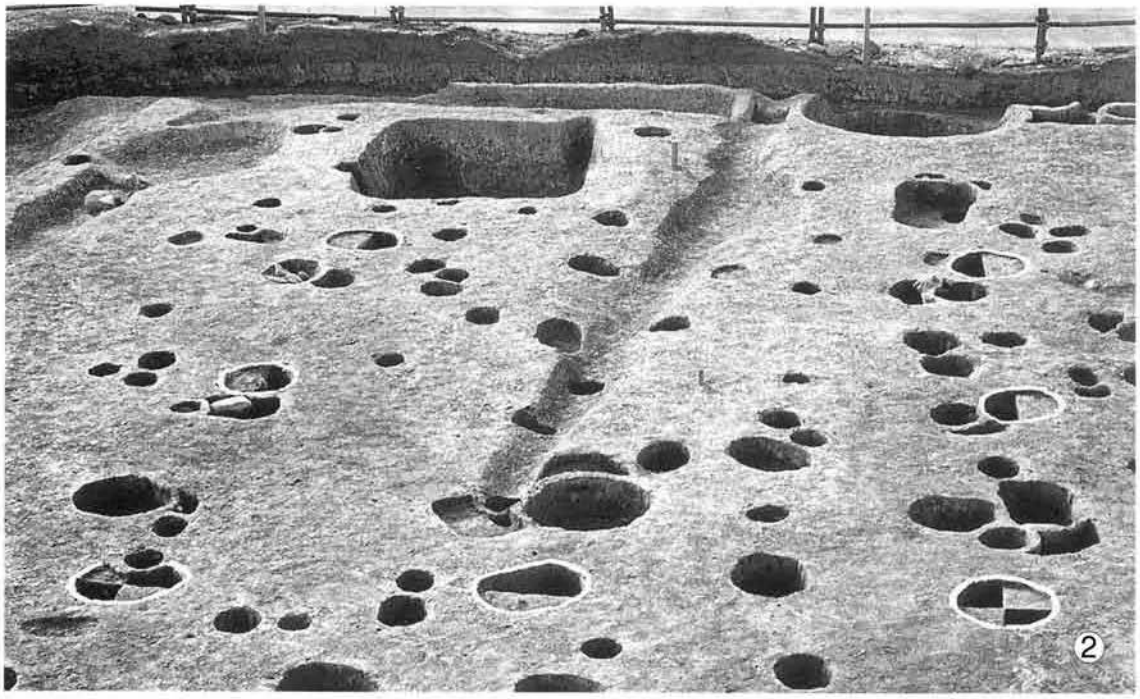
2.A区全景
（東から）



3.A区 区画溝と屋敷地
（東から）



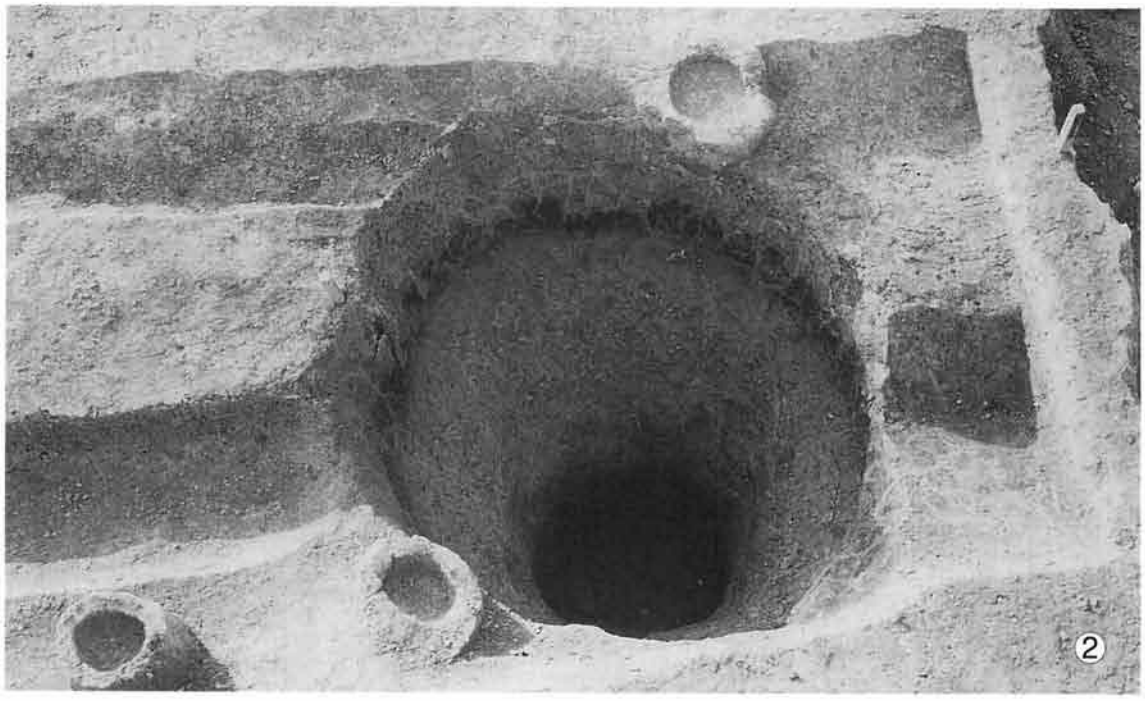
1.建物1
（北から）



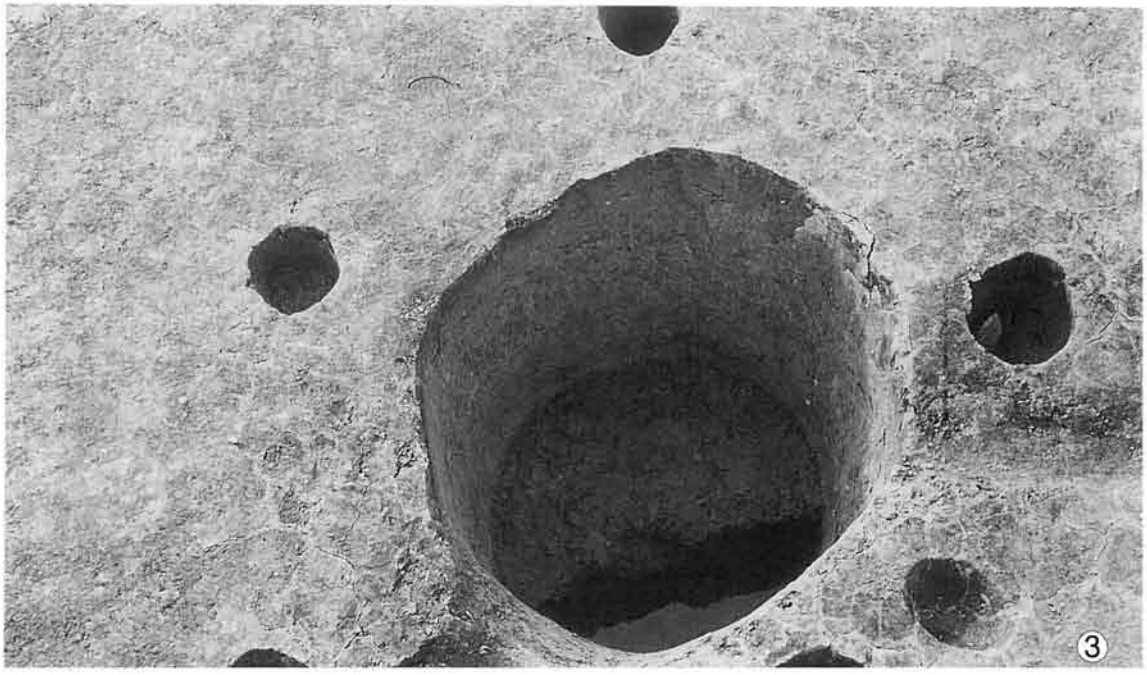
2.建物2
（東から）

3.溝 12・13
（東から）
4.溝 12セクション
（東から）
5.溝 13セクション
（東から）

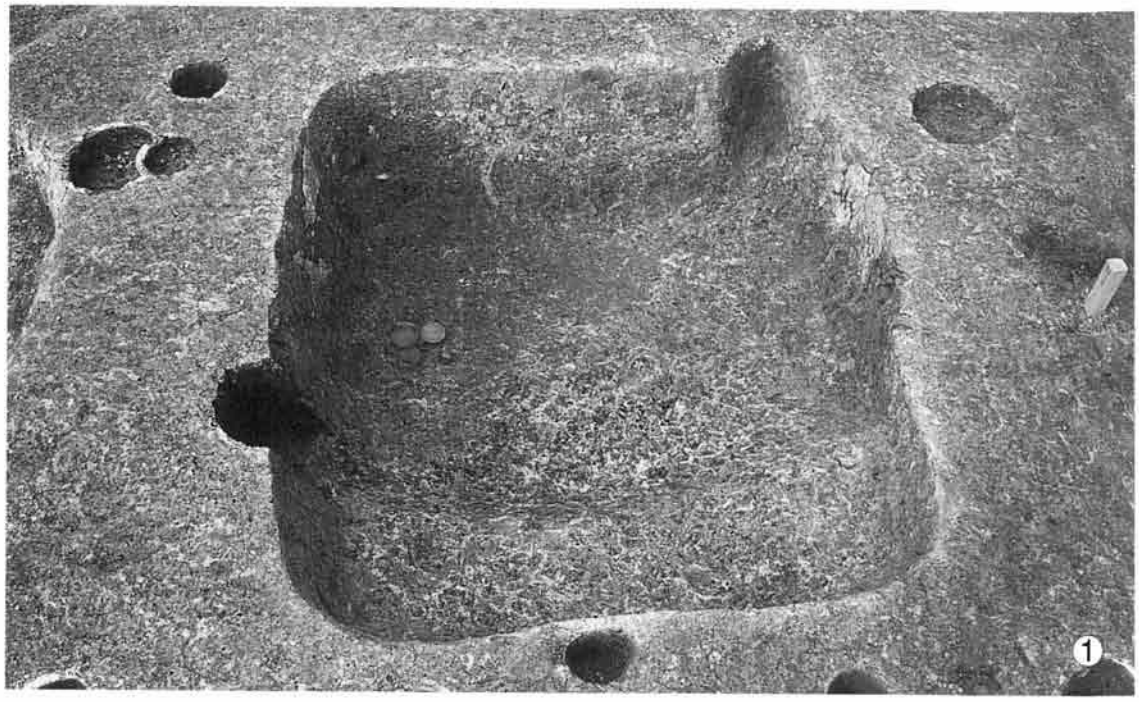
1.井戸30
（西から）



2.井戸20
（東から）



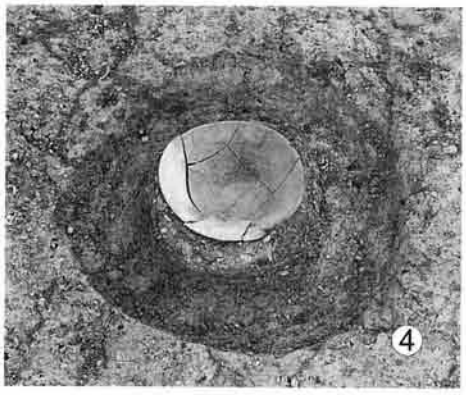
3.井戸25
（東から）



1.土坑9
（東から）

2.土坑9 土器出土状況

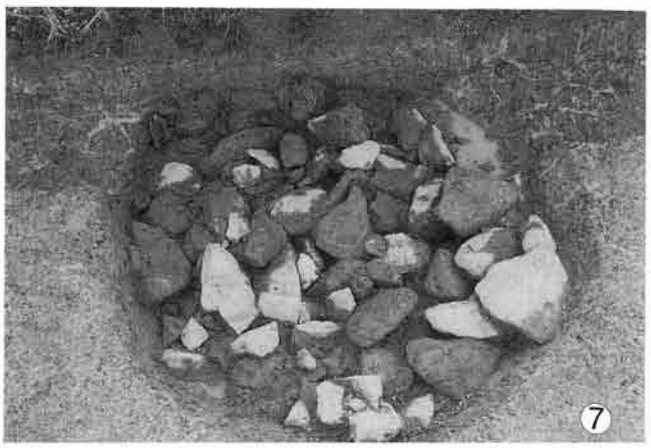
3.土坑28
（東から）



4.桂穴330
土師皿出土状況

5.土坑27
（南から）

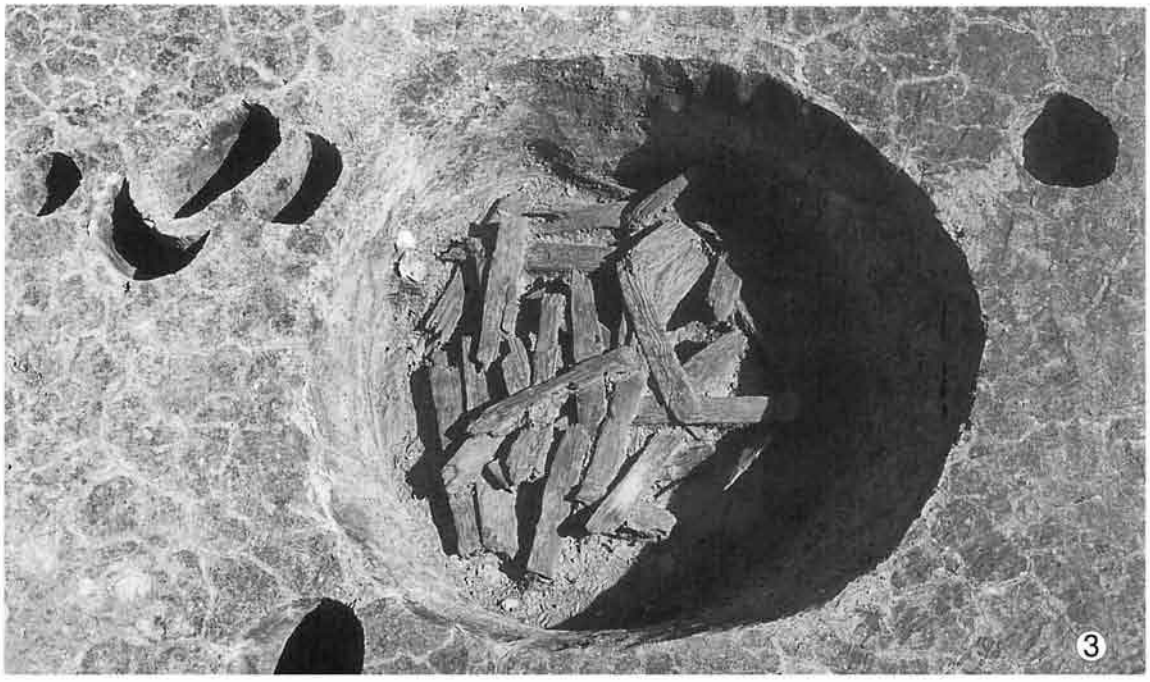
6.桂穴33
瓦器碗出土状況



7.土坑771
（北から）

1.D区全景
（西から）

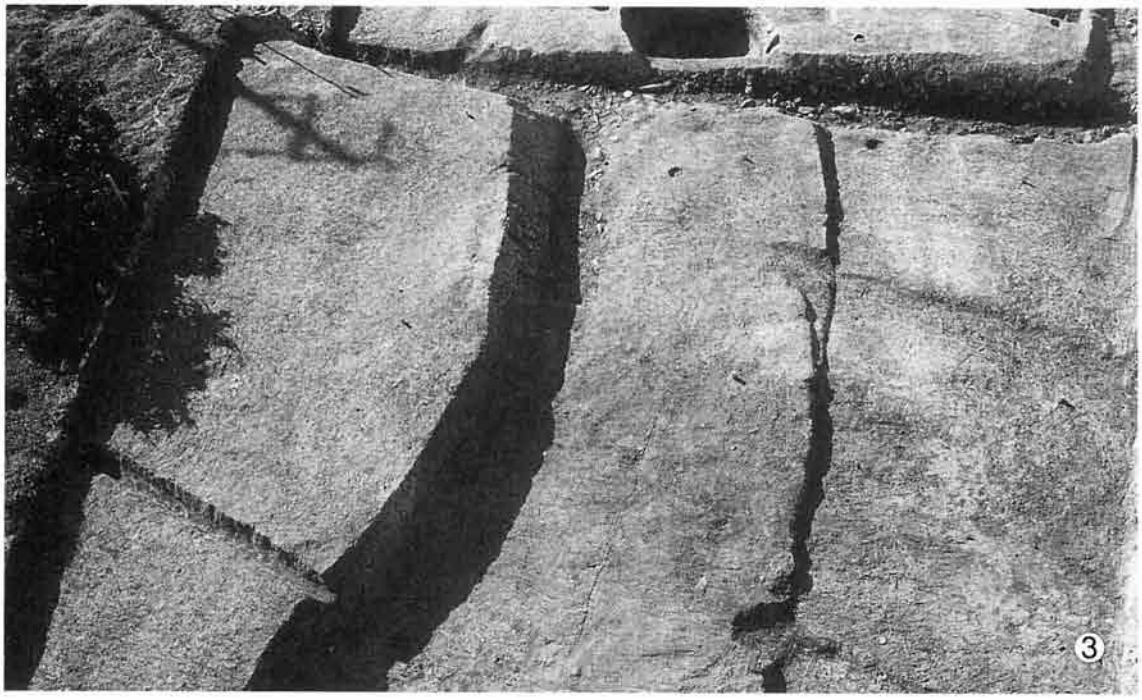
2.D区東端部・建物3
（北から）



3.土坑705
（東から）

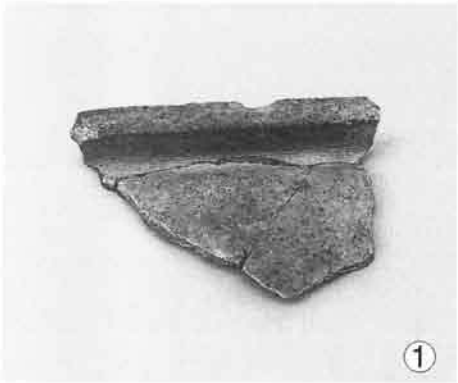
1.土坑705 細部状況
（北から）

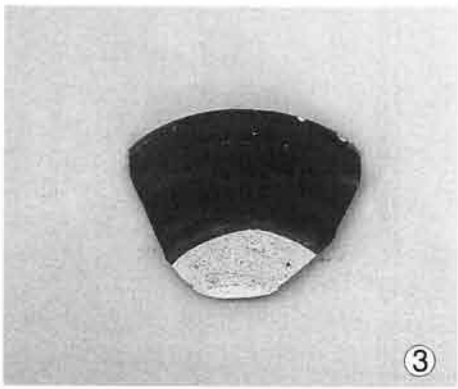
2.D区 南壁土層



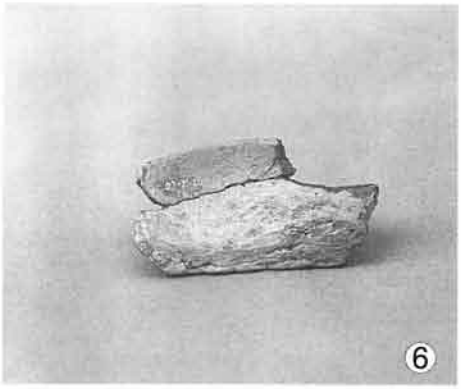
3.B・C区全景
（東から）

4.E区全景
（南から）


①


③

⑤


⑥

⑨

⑩

⑭

⑰

⑳

㉒

㉓

㉕

㉙

㉛

㊶

報告書抄録

ふりがな	いしがたにいせき
書　　名	石ヶ谷遺跡
副 書 名	県道吉備金谷線道路改築工事に伴う発掘調査
編著者名	村　田　　弘
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所 在 地	〒640-8404 和歌山県和歌山市湊571−1番地　　TEL　073−433−3843
発行年月日	西暦2003年10月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
石ヶ谷遺跡	和歌山県有田郡吉備町西丹生図	303631	20	34°03′20″ 東経 135°13′30″	平成14年1月7日～平成14年2月26日	975m²	県道吉備金谷線道路改築工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石ヶ谷遺跡	屋敷跡	鎌倉時代～室町時代	建物・溝・井戸	瓦器碗・土師皿・備前焼擂鉢、壷	屋敷墓と思われる土坑を確認している。

石ヶ谷遺跡

県道吉備金谷線道路改築工事に伴う発掘調査

平成15年10月25日

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷
製本　中和印刷紙器株式会社